



理事会だより (5・12)

- 一、新理事の菅野英余さん(総務部) 田下昌人さん(広報部) 初参加し挨拶。
- 二、各部報告 総務部…定期総会終了報告、けやき・UMECOへ認定団体申請済、「会員名簿・会則」を全会員に配布、高橋正子さん(鷹)四月二八日逝去。会計部…桜まつり会計報告、年会費未納は現在5名。
- 三、令和4年度小田原秋季俳句大会の兼題(新涼、木槿)・締切・各賞・寿齢者表彰等を決定。選者特選賞は佃名誉会長、大石顧問、池田会長、山田副会長、グループ(たけのこ、沈丁)(詳細は本号10頁 事業部)
- 四、秋の吟行会(広報部担当)は、11月8日(火)を第一候補日とし会場は担当に一任。
- 五、理事会の開催時刻を夜間の車の運転など安全優先の観点から昼間とする提案(総務部、会長)があり、7月からは15時開催に変更することを決定。但し6月は従来どおり18時から。

「俳句おだわら」10句抄 (657号より)

岡本史郎 抄出

恋猫の濡れて帰りぬ昨夜の雨
老人に配るチラシや日脚伸ぶ
春風をいっしょに配る郵便夫
戦禍のがるる民陸続と雪霏霏と
臍の緒の小箱光りて吾子卒園
半分の記憶のままで卒業す
苗床に一粒づつの夢を蒔く
雪のウクライナ紅梅の日本曾比区
綿虫の浮遊心電図の波長
菜花映ゆチエルノブイリも青い空

鳥海壮六 抄出

バス待ちの話の尽きぬ梅見あと
蛇穴を出づ東京のと真ん中
この身また経年劣化亀鳴けり
起抜けの一椀の白湯初音聞く
雛飾る諸手の指に物着星
ラジオから世界の天気水温む
廃校の百の窓鳴る春一番
木々芽吹く活断層の上に住む
柔らかく開く手のひら苗木市
路のとう伸びてもうすぐ二年生

岡田 典代	穂坂志げる	木村 和彦	加藤 富江	片野 秋子	守屋 まち	瀬戸 りん	瀬戸 悠	尾崎 一夫	吉田 康雄
木村予史重	杉山あけみ	大石 雄介	中根登美子	小野 菊土	菅野 英余	杉崎 せつ	田中 幸子	伊藤はる子	陌間みどり

第三回藤田湘子記念小田原俳句大会

四月十六日、於小田原三の丸ホール。応募作品一般の部一四四四句、小中学生の部一六二三句、参加者三二〇名。

(一般の部)

大会賞

点けて一人消して独りの夜長かな

田渕 令子

市長賞

産院の待合室や除夜の鐘

柏木 良花

鷹俳句会賞

剥製の閉ぢぬ翼よ虎落笛

藤田かをる

小田原俳句協会賞

立葵誰も帰って来ない村

吾亦紅

小田原文学館賞

東京を鞆に詰めて帰省かな

山内 基成

小川軽舟特選

点けて一人消して独りの夜長かな

田渕 令子

図書館の湘子コーナー春夕

村場 十五

春雨や車掌顔出す落とし窓

西嶋 景子

奥坂まや特選

屋久島の大樹の鼓動天高し

小林 梢

俳句おだわら(5・19メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋(4・22)

久江報

ひとひらの風のこゑ聴く夕桜

足立 和子

うぐひすや古墳の空の広ごりに

川本 育子

ほつほつと芽吹き奏でる雑木山

高橋 小糸

幾度の出会ひと別れ春夕焼

山崎 悦子

台ヶ岳火の香水の香野焼跡

近藤 久江

◆山北(4・28)

由里子報

ランドセル馴染む頃なり燕くる

和田恵美子

八日振りの一滴の水若芽吹く

尾崎 幸子

たんぽぽの絮とびたいという日暮

中山 妙子

勾玉は胎児の形みどりの夜

尾崎 竹詩

湧水に浸す指先風光る

石田加津子

夕映えや飛びたい方へ翔ぶさくら

竹下由里子

◆香雨・梅ごち(4・24)

忠山報

雨の日は雨の色なるしやぼん玉

肥後ちさこ

囀へ口笛かへし庭仕事

関戸わよこ

追ひかける子ら風となりしやぼん玉

青山 典子

背負ひ籠に香りも摘みて茶摘唄

門松 鳳文

囀や夢見ごちに二度寝して

吉田 百代

ゲームの旅終へて見にゆく桜かな
竹の春夫に最後の定期券

岩永佐保特選

破魔弓や星座おのづと位を定め

剥製の閉ぢぬ翼よ虎落笛

立山は白く浮く山磯遊

池田忠山特選

花月夜大往生を遂げにけり

産院の待合室や除夜の鐘

燃え洩る送り火そつと吹き立たす

長谷川きよ志特選

爽やかや海風撫づる湘子の碑

立葵誰も帰って来ない村

天守より海境淡し初桜

山田照子特選

長き夜や母の声音のぐりとぐら

東京を鞆に詰めて帰省かな

腹に息溜めて抱き上ぐ今年米

(小中学生の部)

大会賞

たんぽぽや風がふいても残るもの

小島 月彦

中山美恵子

古屋 徳男

藤田かをる

上田 鷺也

上田 鷺也

柏木 良花

相良 研二

中村 昌男

吾亦紅

明地 敬子

皆春

基成

山内 望星

棕本 望星

伊藤 美結

草庵はいよよしづかに竹の秋

クレソンの花より明くる忘れ水

濡れてなほ御眼やさしき甘茶仏

時惜しむごとく降りつぎ桜しべ

◆こよろぎ(5・12)

つとむ報

木漏れ日や身を寄せ合いて著莪の花

板谷 雅泉

夕星や匂ひ濃くなる花卯木

植松テル子

永き日やにはとりの声牛の声

神山つとむ

◆みなみ(4・16)

かほる報

猫の子のはや巧妙な知恵を持ち

市川めぐみ

春月や寡黙な刻の流れおり

斎藤 静

カーテンの風にじゃれつく子猫かな

加藤 健治

人々の眼集める牡丹かな

小瀬村信子

延長の高校野球に春の月

加藤れい子

急行の通過する駅紋白蝶

加藤 富江

出港の汽笛をつつむ春の月

豊田 幸枝

朧夜の四肢やわらかくして眠る

加藤かほる

◆青梅(5・11)

幸子報

新茶汲む話のつきぬ同胞や

大塚 行人

蹄鉄のかはきし音や馬場五月

湯本とし子

納税書たがふことなく来て五月

神野美代子

桑の実や昭和は遠く夕暮れり

加藤まり子

山笑ふ携帯電話つつぬけに

久保寺トミ子

老鷺の声が声呼ぶ控の間

田渕 令子

捨てるものきっぱり捨て去り立夏かな

田中 幸子

◆沈丁（5・7）

寶子山報

^{からがね}唐銅の風炉に火を入れ客迎へ

中野 文子

炉畳の青きに風炉の湯の匂ひ

若村 京子

風の色野の色挿して風炉点前

柳澤ミサ子

畏まりて若者四人風炉手前

田中 恵一

草庵で風炉の談義や実業家

河本 純子

初風炉や一人語りの始まりぬ

瀧本 敦子

風炉手前老舗の名菓また消える

勝木 澄子

風炉手前稽古の後のスタバかな

菅野 英余

夏来る幼なに布ざうりの赤

高井 幸子

産声や一尾加はる鯉のぼり

片野 節子

散り桜我はその場で立ちつくす

峯尾ユキエ

梅雨入りの薄茶点てるがアメリカン

河本チヨ子

初風炉や袱紗の在り処確かめる

清水美代子

空間を組み立ててゆく風炉手前

寶子山京子

◆春野（4・17）

きよ志報

紫雲英田に伏し青春の甦へる

秋山 昇

さへずりの中を出てゆく霊柩車

伊藤はる子

土塊のむずがゆからう種下し

内田知江子

米寿とてこの世の途中春や春

尾崎 一夫

萎縮する海馬たんぽぽ絮とばす

瀬戸 悠

花過ぎの堤力を抜けてをり

二見 和江

夏来たりけり気の乗らぬエンディング

長谷川きよ志

◆たけのこ（5・6）

悦女報

新緑や小枝の先の小宇宙

久津間百合子

友きつと極楽に居むお花畑

小宮 早苗

一面に野バラの咲いて孫の来る

徳田 公子

夏ブラウスははと仕上げた幼き日

三木 泰子

時間かけ写す墓誌なりうらけし

宮崎 悦女

◆鷹（5・7）

十五報

大屋根の庭にからから鯉幟

青木 孝子

墓原に朝の香煙さへづれり

西賀 久實

万愚節寿命延ぶとふ黒たまご

佐宗 欣二

江ノ島に貝細工選る薄暑かな

須田 晴美

鯉幟街を見下ろす足湯かな

中田 笑子

坂に見て吾が町平らつばくらめ

百川 秀子

堤塘や雨きつて飛ぶつばくらめ

山崎美知子

昆布出汁透き通りけり晩夏光

柏木 良花

手に重き卵サンドや春惜しむ
春潮やホーム静かに列車待つ
喪歸りのあをき夜空や花こぶし
気儘鳴く山羊や仔牛や芽からまつ
貌鳥や帯に仕立てしジャワ更紗
薄雲の中の天日磯遊び
振りかけですます昼餉や花盛り
遠蛙顔真卿の臨書終ふ
春寒の焙じ茶蒸せる急須かな
父母の顔若きまなり昭和の日
独活の皮金平にして夫と酌む
一本の梅満開や地鎮祭
多佳子忌や耳に挟めるほつれ髪
南風や箱屋通りに膠の香
春昼の御殿場線の汽笛かな
甘酒の旗翻る峠茶屋
月涼し母の遺品の鏡掛
遠き日の母の白玉へこみあり
田水張る紫陽花の里夕日照る
時の日やテトラポッドに鳥の糞
白玉に貧しき戦思ひけり

庄司 下 載
瀬戸 りん
高橋久美子
中山智津子
齊藤 桂
芹澤 常子
大木 敬子
大島美恵子
田下 昌人
中根 和子
加藤 幾代
高橋 正子
守屋 まち
米山 翠
來田 新子
大沢 年子
片野 秋子
小林 環
下平 美子
杉崎 せつ
鳥海 壮六

枇杷椀ぐや鳶輪を解いて急降下
亀の子にうかと欠伸を致しけり

◆おほゐ(5・11)

秀泰報

古屋 徳男
村場 十五

川幅に漲る声や夏来る

石井千代子

葉桜が木々に紛れて隠れおり

高橋みどり

新緑の真つ只中で深呼吸吸

風間 秀泰

新樹光シヨパンの音が響きおり

香川 花子

新緑や大きく呼吸したくなり

中津川晴江

もう少し歩いてみよう薔薇真つ赤

中根登美子

指先で消える記憶や昭和の日

小野 菊土

竹皮を脱いで本音の見え隠れ

石井きよ子

新緑や君の退院心待ち

二上 光子

新緑の風に五体を泳がせる

加藤 春江

新緑や過疎の部落に嬰^やの声

中村 昌男

幾重にも緑重なり柔き山

廣田 悦子

新緑や上枝^{ほつえしずえ}下枝と日を掲^かぐ

横塚 昌平

◆零(5・19)

史郎報

蟻地獄怖しプーチンもつと怖し

青木たけを

少年籠もるとえれば蟻地獄

伊藤 道郎

ふるさとの土手に角だす竹の子よ

井上 良子

筍がトンガリ屋根に迫いついた

木村 和彦

疫病や名を変えながら蟻地獄

夕茜三筋数えて夏来たる

喜びも憤怒も同居夏の山

筍群立黒澤映画の野武士めく

大痛ッ筍の新芽を踏んじやった

◆実のり(5・19)

たか志報

五月晴の青と決めたり屋根の色

泣き相撲泣く子泣かぬ子こどもの日

緑陰や楽器弾く人唄ふ人

三の丸抜けて二の丸青葉風

◆草むら(5・20)

重満報

梧桐や終りとしたい再手術

曾孫抱けば籠りし日々に薫風が

踏み込むや菜の花一挙に怒髪天

侵攻に抗う民や躑躅燃ゆ

◆無所属

天空へ角の雄たけび蝸牛

桜湯と桜まんじゅう久し振り

遠足が帰り天文台正午

囀りを遠に静かや二輪草

春炬燵片して寂し膝頭

佐藤 正子

中村 裕子

野川木 一路

岡本 史郎

川合 昌子

岩本ひさみ

杉本 久子

木村 幸枝

新井たか志

石井 秀稀

井上 和子

佃 悦夫

佐々木重満

小林永以子

蓑宮 わか

畠 梅乃

出澤 洋子

一ノ瀬茂代

花水木紅白分かれ並木映ゆ

寂しいと言へぬプライド花の冷

逢える日はなん年なん月夏木立

一本の白木蓮の道しるべ

新緑の幼き影は踏まず行く

蝌蚪に足我にホモサピエンスの尻尾

墓を飾る関東たんぽぽになつた

孫が飛ぶベッドは婆の子供の日

ウクライナへ密書届けよ鳥渡る

白雲と富士の陣取る代田かな

水筒のコボンと午後の片陰に

老鷺や留守電に聴く友の声

ひとりごとは無気味卵の花腐しかな

夏近し戯れ合ふ鯉のしぶきにも

リモコンの電池足りない蜃気楼

草食系男子ひよろりと花しようぶ

五月雨もままに沖縄五十年

鈴木久美子

大佐田俊美

穂坂志げる

山田 照子

田畑ヒロ子

大石 雄介

大石 和子

岩楯恵津子

北村 文江

須田 聡子

小澤 園子

山口 千代

瀬戸 正洋

木村美千代

杉山あけみ

岡田 典代

木村与史重

俳句おだわらの締切は毎月19日必着です。

翌日配達・土日配達がないことを考慮して遅れないようにお願いします。(広報部)

川合 昌子

庭先で露の葉摘めば夏の月
黒揚羽ゆらり揺らぎつ陽に向かい
井戸端へ糸蜻蛉野中は暑い
時折に大欠伸のする雨蛙
雨蛙鳴き始め雲脚速し

勝木 澄子

柿若葉母の言の葉やわらかし
厄年がなくなる齡粽巻く
新緑の山のアロマを持ち帰る
新じゃがのコロッケ大さ夫を待つ
ハンカチの折目角たつ薄暑かな

大木 敬子

うつすらと葉の先紅し若楓
ロボットの忠実な給仕や柏餅
吾の背をこする手柔し菖蒲の湯
青梅や鳥居の脇の駐在所
伊豆小島天草干して静かなり

秋山 昇

囀りを抱く神木暮れなづむ
白蝶の光となりて空に消ゆ
新樹光仏足石の手づれかな
電線に音符のやうに燕どち
溪流のしぶきに跳る花五倍子

和田恵美子

晩春の雲遊ばせる丹沢湖
住み馴れし路地の往復柿若葉
昭和の日キャッチボールする親子
伝説の河村城址風薫る
健脚と言われし老の夏帽子

吉田 百代

もてなしにまづは打水客を待つ
海よりの風青々と夏の浜
挽ぎたてのトマトひと皿朝食に
邸園の閑けき流れ涼しさよ
波音のかすかに聞こえハンモック

中津川晴江

サクラサク我が家の笑みも満開に
母の傍離れず覗く入園児
新緑下に大きく呼吸したくなり
躑躅咲き老老介護癒されて
野藤咲く周囲に甘さ漂いし

久保寺トミ子

春寒や一枚羽織る野良仕事
野良仕事終えて遅日の鍬洗ふ
生涯はずっと農婦や山笑ふ
鍬仕事多くなりけり夏近し
春の土匂ふ指先辞書を繰る

■北村文江句集『ハイタッチ』鑑賞

佐々木重満

北村文江さんと言葉を交わすようになったのは神奈川県現代俳句協会西部ブロックの定例「丹沢句会」からで四、五年くらいである。

句集のあとがきに古希の記念誌として纏めたところ。作者は丹沢山地、箱根外輪山、散歩コースに雄大な富士山が遠望できる、自然環境豊かな地に住む。句集全百三十句中、七割約九十句が植物を詠んでいる。また、章立ても全て植物。豊かな環境に触発された要因の一つでもあろう。

筆者の独善・独解で作品を分類、鑑賞してみたい。作品を大別すると ①対象をひと掴みし、句に大きな拡がりを ②対象を鋭く見つめ、心象風景に ③母親、女性の視点 ④農作業 ⑤俳味の五つに分類されよう。

①対象をひと掴みし、句に大きな拡がりを

1 寒気団甲斐百名山にへばりつく

2 灯台は海の柱か天高し

3 囀の空どこまでも自由席

4 オオムラサキ大和はかくも美しき

5 天上は歪むことなき桐の花

6 ICカード滑り込む先冬銀河

7 青空は城の打ち掛け桜の芽

8 丹沢の骨格ゆるぶ稲架を解き

どの句にも透明感があり、大きな空間へ誘い込まれる。景もハッキリと見えてこよう。句番2、海育ちの筆者には豊後水道の水の子灯台が浮かぶ。海面から天に届くかのような巨大な灯台である。句番3、国鳥オオムラサキをかくも格調高く詠い挙げています。

②対象を鋭く観察し心象風景に

1 沖霞心のどこかに難破船

2 水仙の香を解く潮の速さかな

3 夕顔の白にもありし傷心きずこころ

4 生涯は人のぬくもり走馬燈

5 遠雷やいつか去りゆく煩惱も

6 平凡も磨けば非凡竜の玉

7 朝顔の穠なき舟の一人旅

8 梅真白人生これからパートⅡ

9 本懐は誰にも告げず毛糸玉

句番1と5、上五と下五の取合せが絶妙。句番3、夕顔の花弁は薄くて孔が空いていたり破れたりしているものが多い。よく観察しないとこのような発想は出て来ないのではなからうか。

③母親、女性の視点

1 縫ひ始め産着今にも歩きさう

〈長女結婚〉

2 紫陽花や太平洋にブーケトス

3 春泥や何とかなるさこの先は

句番1、母親としての喜びが下五の措辞に溢れ出ている。句番2、カップルの洋々たる将来を母として願わずにはいられないものがある。中七の太平洋が効いている。

④ 農作業

1 捨て畑の風をつぶやき尊徳忌

2 青梅や農婦に七曜なき暮し

3 太陽が爆発しさうトマト熟れ

4 九十の鋤一本や春の耕

日本農業は高齢化に伴い離農が増えている。句番1、尊徳忌が効いている。現状の農政策が経済安保からみていいのだろうか。句番4、父上への尊敬と長寿の願いが。

⑤ 俳味

1 なんてったって曲者揃ひ唐辛子

2 冬瓜のつべこべ言わぬ面構へ

3 大津絵の鬼をそびらに月夜酒

掲句はどれも対象をよく観ており、じつに俳味溢れる作品に仕上げられている。句番2、中七から下五への展開が素晴らしい。句番3、吞兵衛の筆者としては

このような気持ちの余裕を持ちたいものである。

本鑑賞から作者の自選句を外しましたがご容赦を。まだまだ鑑賞したいが、紙数が尽きたのでこの辺で筆を置くことにする。北村さんの今後の益々のご活躍を期待したい！

「ハイタッチ」自選十句

北村文江

あばら骨さらし春待つ日本丸

守り木として三年空へミモザ果つ

みどり児の十指果敢に雲の峰

藤村忌パンの匂ひは路地に満ち

産土の吉野は遙か蝌蚪の雨

観覧車は地球の齒車海龍

鷺草の飛び立つことなき淋しさよ

法螺貝は森へ筒抜け冬安居

迎へ火や路地迷はずに来いと言ひ

日脚伸ぶシルクの翼。ピアニスト

理事会日程

6 / 9 (18時)

7 / 14

8 / 11

いずれも木曜日けやき (7月からは15時)

令和4年度小田原秋季俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「新涼」「木槿」(いずれも傍題可) 各一句

一組 未発表作品に限る。

締切 令和四年七月二十九日(金) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒250・0851 小田原市曾比二四三二一

米山 翠苑(☎〇四六五―三六―四五九〇)

*作品は投句原稿とおり印刷しますので、楷書で、

大文字、小文字をはっきりとお書き下さい。

*第二部への参加・不参加もご記入下さい。

選者 協会役員及び各地有力作家

賞 小田原市長賞以下二十位、選者特選賞

第二部 俳句大会

日時 令和四年十月二日(日)

会場 おだわら市民交流センター(通称UMECO)

受付 十一時 投句締切十二時

開会十二時半 終了十五時半(予定)

整理費 五百円(呈飲み物)

当日題 秋季雑詠二句 総互選

賞 小田原俳句協会会長賞以下五十位

*お願い 会場では今のところ飲食可能ですが、食事は各自で済ませてご参集下さい。マスクの着用及び感

染防止対策(会場での手指の消毒、三密回避等)にご協力下さい。

*なお新型コロナウイルスの状況によっては第二部の中止もありますことをご了承ください。

★当協会員で令和三年十一月四日(文化の日俳句大会翌日)から四年十月二日(秋季大会当日)に満年齢で還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿に達する寿齢者への恒例の表彰を行いますので該当者は奮ってご投句下さい。(表彰は投句条件)

〈主催〉小田原俳句協会 〈後援〉各地俳句協会

俳句おだわら鑑賞(令和4年2月号)

福寿草どこに置いてても笑つてる 寶子山京子

自然界の大きなリズムの中で福寿草がひらく。「笑つてる」の擬人法がよく効いている。この句を呪文のように唱えていたら、元気がでてきた。愉快になってきた。

俄に福寿草が土偶の類に思えてきた。どこに置かれようが人知れず、神秘的な輝きを放つ存在感のあるものに。福寿草を見ているが、見られてもいる。

福寿草から見ると、私たち人間はどう映っているのだろうか。(竹下由里子)